AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

卒業研究抄録集(看護学科) (2016.12) 平成28年度:35-36.

北海道の保健師の災害看護に対する意欲と役割意識についての実態調査

合田 奈央, 瀬崎 百合愛, 武田 里那

北海道の保健師の災害看護に対する意欲と役割意識についての実態調査

学生氏名：合田奈央　瀬崎百合愛　武田里那
（指導：藤井智子先生）

緒言

日本では相次いで自然災害が発生しており、阪神・淡路大震災をきっかけに、災害看護における看護職の役割は大きくなっている。特に北海道は地震や雪害、噴火などが多い地域であり、保健師の災害看護について様々な活動報告がある。しかし、近年の保健師の災害看護における役割意識等についての先行研究はなかった。そこで本研究では、北海道の保健師の災害看護に対する意欲と役割意識についての現状と課題を明らかにすることを目的とした。

方法

研究対象：北海道の市町村、保健所に勤務する保健師 152 名。

データ収集方法：無記名自記式の質問紙調査を行った。機縁法により市町村と保健所に電話し、調査の趣旨を説明し同意が得られた 22 施設に説明文とアンケート用紙、返信用封筒を郵送した。回収は保健師個人の郵送による返送とした。

調査内容：基本属性、被災・災害看護・災害派遣・研修の経験の有無、災害看護への意欲、被災時に保健師の役割を果たすうえで気がかりなこと、災害看護における保健師の役割意識についてである。

分析方法：各項目を単純集計した。災害派遣に行きたいと思うかに対し、「とても思う」、「思う」を「意欲あり群」、「あまり思わない」、「思わない」を「意欲なし群」とし、2 群間で X^2検定を行い、相関関係の分析をした。

倫理的配慮

研究の趣旨、所要時間、研究結果は個人が特定できないように処理し不利益が生じないことを書面で説明した。また、研究への参加は自由意思とし、アンケートの記入・返送をもって同意を得た保健師を対象とした。本研究は、旭川医科大学倫理審査委員会に承認を得て実施した。

結果

対象者は 152 名で回収数は 112 名(回収率 73.7%)、分析対象は 112 名(有効回答率 100%)であった。

1．基本属性

年齢は 20 歳代 23 名(20.5%)、30 歳代 32 名(28.6%)、40 歳代 31 名(27.7%)、50 歳代以上 26 名(23.2%)であった。

役職は、役職なし 48 名(42.9%)、主任/主査/係長 52 名(46.4%)、主幹/課長補佐 7 名(6.3%)、課長/管理職 4 名(3.6%)、嘱託 1 名(0.9%)であった。

職場は、市町村 81 名(72.3%)、保健所 30 名(26.8%)、その他 1 名(0.9%)であった。

職場の保健師数は、1～5 人が 26 名(23.2%)、6～10 人が 65 名(58.0%)、11～15 人が 19 名(17.0%)、無回答 2 名(1.8%)であった。

2．災害看護の経験

勤務地で避難の必要な自然災害が起きたことのある者は 78 名(69.6%)で、大雨・津波が最多であった。勤務地での災害看護の経験者は 23 名(20.5%)、災害派遣の経験者は 13 名(11.7%)であった。

災害看護の研修の経験者は 36 名(32.1%)で、そのうち保健所保健師が 21 名(58.3%)、市町村保健師が 15 名(41.7%)であった。研修場所は職場外が延 26 名、職場内が延 13 名であった。災害マニュアルを読んだ者は 98 名(87.5%)であった。今後勤務地で災害が起こると思う者は 97 名(87.4%)であった。

3．災害看護への意欲

災害派遣に行きたいと思うかについて、とても思う 11 名(9.8%)、思う 50 名(44.6%)で「意欲あり群」が 61 名(54.4%)、あまり思わない 41 名(36.6%)、思わない 10 名(8.9%)で「意欲なし群」が 51 名(45.5%)となった(表 1)。

①「意欲あり群」と「意欲なし群」の理由

意欲あり群(n=61)の理由では、「専門職としての役割である」が 54 名(88.5%)、「勉強になる」が 18 名(29.5%)、「役に立ちたい」が 17 名(27.9%)と、「専門職としての役割である」が約 9 割と非常に多かった(表 2)。

意欲なし群(n=51)の理由では、「災害看護の知識不足」が 29 名(56.9%)と最も多く、「日常業務優先」が 20 名(39.2%)、「自信がない」が 18 名(35.3%)、「保健活動の経験不足」が 15 名(29.4%)であった。「その他」の理由を挙げる者は 16 名(31.4%)で、「子供が小さい」や「家庭での役割」、「自分の健康状態」に関すること等が挙がっていた(表 3)。

②「意欲あり群」と「意欲なし群」の相関

職場と派遣経験、研修経験の 3 つで有意差がみられ、年齢や役職、職場の保健師数などその他では有意差はみられなかった。職場は市町村よりも保健所、派遣や研修は経験がある者ほど、意欲があった。

4．災害看護時の気がかり

被災時に保健師の役割を果たす上で気がかりなことがあるかについて、とてもある 33 名(29.5%)、ある 71 名(63.4%)、あまりない 4 名(3.6%)、ない 3 名(2.7%)、無回答 1 名(0.9%)であった。少しでも気がかりがある者は 97.3%とほぼ全員であり、1 人当たり 3.14 個の気がかりがあった(表 4)。

気がかりの内容として多かったのは、「支援の技術不足」が 74 名(67.9%)、「災害に関する知識不足」が 69 名(63.3%)、「自分の体力」が 45 名(41.3%)であった。

5．災害看護の役割意識

保健師が役割を果たすべきだと思う災害サイクルの順位について、重要度の高い 1 番目と 2 番目の合計は、亜急性期〈災害発生後 48 時間～2, 3 週間〉73 名(65.2%)、復旧・復興期〈災害発生後 2, 3 週間～生活環境や人々の生活が発災前と同等の状態に回復するまで〉61 名(54.5%)、平常時 43 名(38.4%)、急性期〈災害発生直後～48 時間〉40 名(35.7%)の順となった(図 1)。保健師の役割の重要性について、「要配慮者や避難所生活者、車中泊者、自宅生活者の健康管理」、「早急に対応が必要な健康課題の把握」が「とても重要である」と回答した者は約 9 割と特に多かった(図 2)。一方で、「必要な物資の調整」、「急性期の救命救護活動」、「住民参加での復興活動支援(まちづくり)」は、「あまり重要ではない」が 2～3 割であった。

考察

1. 災害看護に対する意欲の現状

過去に災害が起きた地域にいる者は約 7 割、今後起こりうると考えている者は約 9 割で、災害のない地域の保健師も災害への危機意識があるといえる。また、災害マニュアルを読んでいたり、災害派遣の参加理由で「専門職としての役割」が非常に多く、保健師の災害における役割の専門意識は高いといえる。

危機意識や専門意識が高い一方で、災害派遣の意欲がある者は半数程度に留まった。その理由としては、災害看護の知識不足や保健活動の経験不足等、自信に関することが上位にきている。気がかりな内容としても「支援の技術不足」「災害に関する知識不足」を挙げる者が多く、知識・経験不足といった意欲なし群の理由と類似していた。災害派遣や研修の経験がある者は派遣の意欲が高いことからも、災害看護に関する知識や技術を習得するための学習の場を設けることが大切であるといえる。

また、日常業務の優先や家庭での役割等の理由も派遣への意欲に関連しており、職場の体制や家族の状況に影響を受けていると推測され、対策が難しいものもあった。

2. 災害看護の役割意識の現状

青木ら(2006)によると、保健師の役割意識について重要な時期は復興期よりも急性期の方が高く、復興期に役割はないという傾向にあった[1)]。しかし、本研究では、重要な時期は急性期よりも亜急性期や復旧・復興期だと考える者が多く、異なる結果となった。その理由として、2006 年以降の 10 年間に、東日本大震災や熊本地震等の大規模な自然災害が発生し、長期的な支援の重要性が高まったことが考えられる。

保健師の災害看護における役割では、要配慮者や被災者の健康管理が高かったことから、保健師は健康や生活の視点から被災者を支援することを専門職としての役割と捉えていることが明らかになった。一方で、保健師の役割として、救命救護活動やまちづくりの役割意識が低かった。その理由として、救命救護活動は医師・看護師、まちづくりは社会福祉協議会等、これらについて保健師は他職種の専門性が高い活動内容だと捉えていると考えられる。

3. 災害看護における課題

本研究より災害看護の学習の場の重要性が明らかとなったが、日常業務に追われ学ぶ機会が少ないという現状があった。草野ら(2012)によると、平常時の保健師活動が防災・減災につながると推測されている[2)]。そのため、平常時の業務に災害時を想定した地域の健康管理や要支援者の把握、関係機関との連携を行うこと、また保健師が自信をもって活動するために学習の機会を設けることが大切であると考えられる。

謝辞

保健師の皆様、アンケートへの寛大な受け入れと、丁寧な回答をして下さり、誠にありがとうございました。

引用文献

1)青木実枝, 鎌田美千子, 川村良子ら(2006):災害時ヘルスケアニーズに対する保健師の役割意識, 9 巻, p1-10, 山形保健医療研究.

2)草野恵美子, 小出恵子, 野村美千江(2012):津波災害を経験した住民・行政職員と外部支援保健師が必要と考えた地域における平時の防災・減災教育, 71 回, p485, 日本公衆衛生学会総会抄録集.

表 1 災害派遣に行きたいと思うか

(n=112 名)	人数	%
とても思う	11	9.8
思う	50	44.6
あまり思わない	41	36.6
思わない	10	8.9

表 2 意欲あり群の理由(複数回答)

(n=61 名)	人数	%
専門職としての役割	54	88.5
勉強になる	18	29.5
役に立ちたい	17	27.9
災害看護への興味	8	13.1
自分や知人の被災談	7	11.5
災害看護経験の活用	3	4.9
災害看護知識の活用	1	1.6
その他	5	8.2

表 3 意欲なし群の理由(複数回答)

(n=51 名)	人数	%
災害看護の知識不足	29	56.9
日常業務優先	20	39.2
自信がない	18	35.3
保健活動の経験不足	15	29.4
被災地に赴く不安	9	17.7
他に適任者がいる	6	11.8
その他(子供が小さい等)	16	31.4

表 4 気がかりの内容(複数回答)

(n=108 名)	人数	%
支援の技術不足	74	67.9
災害に関する知識不足	69	63.3
自分の体力	45	41.3
重要他者の安全・健康	42	38.5
自分の安全性	35	32.1
重要他者との連絡方法	23	21.1
所属機関との連絡方法	23	21.1
交通手段	20	18.3
その他	11	10.1

図1 災害サイクルの優先順位

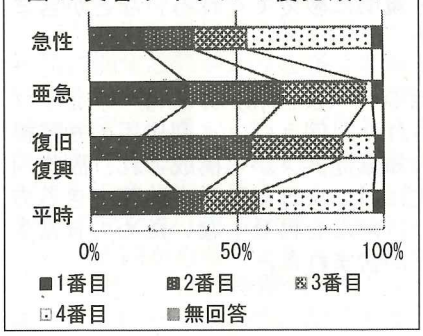

図2 保健師の災害看護における役割の重要性